

概要

2020年4月－2021年3月の間、脳神経外科常勤医不在の期間があったが2021年4月より常勤医として赴任し微力ではあるが入院診療を再開した。

一人での診療は当院他科の先生方、コメディカルの方々や山口大学脳神経外科からのバックアップが前提であった。仕事量のある程度制御せざるを得ない場面もあったが、周囲の方々のご協力も頂き、ある程度ニーズに応えることは出来たのではないかと考えている。

2021年4月から12月までの9ヶ月間で脳神経外科の総入院数は191人であった。内訳は脳梗塞89名、脳出血25名、くも膜下出血5名、頭部外傷20名、慢性硬膜下血腫6名、てんかん14名、その他32名であった。脳神経外科の特性もあり緊急入院がほとんどで、96.9%（185名）を占めていた。

脳梗塞の症例が一番多く入院されたが、ほとんどが発症より時間が経過した時点で搬送されておりtPA静注療法や経皮的血栓回収術の適応外であった。tPA静注療法は8名に対して行い、その内3名はdrip & shipで山口大学に搬送した。tPA静注療法に関しては以前2人体制で診療を行っていた頃の結果と比較すると施行数が減少していた（2019年、19例/年）。今回年報を記載するにあたり、集計の機会を得て現状が把握できた。適応を検討する際、施行するかしないか迷う症例もあるが、侵襲度の高い治療に対するハードルをもう少し低くしても良いのかも知れない。また急性期血行再建に関しては年々治療適応も拡大してきており新しい知見のuploadの必要性を感じている。今後も自己研鑽が必要だと考えている。

脳出血に対する血腫除去術に関しては開頭1例、内視鏡下3例であった。重症例は少なく、多くが内科的治療のみで治療可能であった。くも膜下出血に関しては開頭脳動脈瘤クリッピング術を2件、コイル塞栓術を2件行った。手術室の協力もあり、これまでの期間で内視鏡下手術や開頭術は滞り無く行えるようになった。仕事のバランスを取りながらではあるが、脳神経外科医の増員に備えて今後は手術件数を増やしていきたいと考えている。また、これら脳卒中関連のデータは日本脳卒中学会に提出し

一次脳卒中センター（PSC）認定の申請を済ませている。

脳神経外科の分野も他に変わらず血管内手術や内視鏡手術など低侵襲手術が主流となってきた。このことにより周術期の有害事象が減り、結果的に手術適応も拡大している。当科としても山口大学の支援を受け低侵襲手術を積極的に導入して行きたいと考えている。一方で低侵襲手術では対応できないケースも一定の割合で存在しているため、訓練されたmicro-neurosurgeonは今後どの時代にも一定数必要だと考えられる。一人体制の期間は血管外科や外傷の手術も滞り無く行えるような環境を作り、増員の際にはこれらの手術を当科の魅力の一つにしたいと考えている。

当院は下関地域の主要病院の一つであると同時に地理的に豊北や長門地域との連携も取りやすい、地域の拠点となり得る病院である。今後の当院の発展に寄与出来るよう尽くしたいと考えている。

2021年4月～12月 手術件数
総数 38例

開頭脳動脈瘤頸部クリッピング術 2例
開頭血腫除去術 1例
内視鏡下血腫除去術 3例
減圧開頭術 1例
視神経管開放術 1例
脳室ドレナージ術 4例
VPシャント術 1例
慢性硬膜下血腫穿孔洗浄術 10例
コイル塞栓術 2例
経皮的脳血管形成術 (PTA) 1例
経皮的頸動脈ステント留置術 5例
その他 7例